

佛蘭西書巡覧 33

平山弓月

(タイトルを見れば)ラクワ同様、フランクリンの興味の対象がどれくらいまで広がっていたか、*érudit* (碩学) という言葉の意味の一端を示しているように思われる。

坂東三郎



食いしん坊で呑兵衛と人からも言われ、自らも認めている筆者の頭の半分以上は飲食に関する事で埋め尽くされているようです。ですから紹介させていただく書物も、どうしてもこの分野に偏ってしまうのです。お読みいただいている皆様のご容赦をお願いいたします。

今回取り上げる、アルフレッド・フランクリン *Alfred Louis Auguste Franklin (1830-1917)* の、27巻に及ぶ『往昔の私生活』 *La vie privée d'autrefois, Art et métiers, modes, mœurs, usages des Parisiens du XIXe siècle au XVIIIe siècle d'après des documents originaux et inédits, (1887-1902)* の中でも、どうしても飲食・美食を扱う巻に目が行くのです。ということで1893年に出た、「コーヒー・紅茶・チョコレート」 *Le Café, le thé & le chocolat* を手に取りましょう。

1856年にフランクリンは、パリ左岸コンティ河岸に今も存在する、マザリーヌ図書館に員数外の補佐官として入りました。この図書館は、17世紀絶対王政を支えた宰相にして稀代の蒐集家でもあったマザランが命じて造らせたものです。その後、本雇の司書となり、副館長を経て1885年には館長職につきました。

一方で、歴史家として多くの書を、図書館に職を得てから世に問い始めました。特に『マザリーヌ図書館史』 *Histoire de la Bibliothèque Mazarine (1860)* など、パリにある幾多の図書館の歴史を綴りました。彼の興味・関心は次々に拡大し、彼が筆を染める対象も多岐にわたることとなりました。その成果が、先にあげた27巻に及ぶ『往昔の私生活』となるのです。

では、「コーヒー・紅茶・チョコレート」の巻を繙きましょう。

À l'extrémité de l'Yemen, un Arabe qui gardait des chèvres --- ou des chameaux --- et venait sans doute de conduire ses bêtes dans un pâturage nouveau pour elles, fut surpris de les voir toutes privées de sommeil et en proie à une excitation inaccoutumée.

イエメンの先端部で、一人のアラビア人が羊もしくはラクダの番をしていて、動物たちにとっては新しい牧草地に連れてきたばかりであった。そして彼は、驚いたことに、動物たちがすっかり眠気を奪われ常ならぬ興

奮状態にあるのを目の当たりにしたのである。

「コーヒーの起源」と題された第1章冒頭の文章です。この羊（あるいはラクダ）飼いは、近くにあった修道院に目にした事態を告げると、修道僧たちの調査で小灌木の実が見つかり、実験によりこの実が興奮作用を引き起こすことが発見されたのでした。深夜のお祈りのため、眠ってはいけない修道僧たちの「眠気覚まし」として用いられたと、文章は続きます。

筆者は、茶道の高名なお家元から、禅とお抹茶との関係を伺ったとき、その類似に思いを馳せたものです。

それでは、嗜好品としてのコーヒー及びカフェの、パリにおける本格的な拡がりほどのような経過をたどったのでしょうか。第2章「パリにおけるカフェの始まり」で、1680年頃には19世紀末のカフェのような施設は全くなく、上流階級の人士は全く寄りつくところではなかった、と述べた後次のように書いています。

L'honneur d'avoir changé tout cela appartient à un gentilhomme Palermitain, nommé Francesco-Procopio dei Coltelli. Comment vint-il échouer à Paris ? on l'ignore.

こういった状態を変えてしまうという名譽は、フランチェスコ・プロコピオ・デイ・コルテルリという名のパレルモ貴族のものである。どのようにして彼はパリにやってきたのであろうか。それは誰にも分からない。

フランス名フランソワ・プロコブが、パリで一大カフェ革命を起こして以降の歴史は、多くの書物が伝えていますが、ここでは詳しくは立ち入らないこととしましょう。

「碩学」の名に恥じず、フランクリンの叙述には、おそらくは彼がその全貌を知る、マザリーヌ図書館の収蔵書であろう多くの古典籍からの引用がなされ、筆者のごとき貧弱で底の浅い知識では、なかなか太刀打ちできるものではありません。しかし、1ページ1ページ読み進めれば、極上年の葡萄酒を味わう悦びに通底する、知的渇きを癒してくれる、読書の真髄に迫るような歓びを感じさせてくれます。体験して見てください。

ひらやま ゆづき (教授・フランス語・フランス文化論)